

新任教職員紹介



西脇 菜穂子

学事局
授業支援グループ

国際部での勤務・海外研修(大学院修士課程)を経て、8月より授業支援グループに配属されました。西脇菜穂子と申します。この度、APの運営に事務職員として携われることになり、身の引き締まる思いです。本学の教育力の向上に向けて、チームの一員として戦力になれるようがんばります。どうぞよろしくお願ひ致します。



多田 泰紘

教育推進部
特別任命助教

今年度より特別任命助教として教育推進部のメンバーとなりました。多田泰紘です。大学の教育内容・方法の改善や、学習支援、FD・SDの実施に携わっています。現在は教育・学習の分野をフィールドにしていますが、大学院時代の専門は生物学でした。生き物大好き人間で、同居人のリクガメ、ヤモリ(2匹)、カエルと楽しい毎日を過ごしています。



矢田 尚也

教育推進部
特別任命助教

2018年4月に教育推進部に着任した矢田尚也と申します。教学IRプロジェクトを担当しております。今はまだ溢れんばかりのデータに振り回されっぱなしではありますが、高等教育機関としての関心の良し悪しを公平な目で、理解しやすい形でお伝えしていきたいように努めてまいります。よろしくお願ひいたします。

お知らせ

◆大阪府立大学・大阪市立大学・関西大学AP合同フォーラムを開催します

題名：今、あらためて学修成果とは何かを問う：第3期認証評価の先のFDを目指して
日時：2019年2月9日(土) 13:00～17:30 場所：梅田キャンパス

- 第1部 基調講演 松下佳代氏(京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)
「学習成果とは何か：その評価と教育・学習改善への活かし方」
- 第2部 事例報告
 - ・関西大学 岩崎千晶(教育推進部 准教授)・多田泰紘(教育推進部 特別任命助教)
 - ・大阪府立大学 星野聡孝(高等教育推進部門 教授)・畑野 快(高等教育推進部門 准教授)
 - ・大阪市立大学 西垣順子(大学教育研究センター 准教授)・佐々木洋子(大学教育研究センター 特任助教)
- パネルディスカッション
 - ・コーディネーター 西垣順子
 - ・パネリスト 岡田忠克(関西大学 学長補佐) 高橋哲也(大阪府立大学 副学長) 飯吉弘子(大阪市立大学 大学教育研究センター 教授) 松下佳代氏(京都大学 教授)

お申込み期日：2019年1月20日(日)

◆明治大学・関西大学合同IRシンポジウムを開催します

題名：私立大学におけるIRの可能性
日時：2019年12月22日(土) 14:00～17:00 場所：梅田キャンパス

- 第1部 各大学からの報告「IRの活用と可能性～IRはプログラムレビューを支援できるか」
- 第2部 パネルディスカッション「私立大学だからこそそのIRのあり方」
 - ・コーディネーター 森 朋子(関西大学 教育推進部 教授)
 - ・パネリスト 千田亮吉(明治大学副学長、教務部長、商学部教授) 岡田忠克(関西大学学長補佐、人間健康学部教授)

お申込み期日：12月16日(日)

【お申込み方法】 お申込み期日までに、右記URLの「お知らせ」内記事の申込フォームからお申込みください。 <http://www.kansai-u.ac.jp/ap/>

事務局より

早いもので2014年に採択されたAPの取組みも、事業終了まで残すところ1年半を切りました。もちろん、終了と言っても文部科学省補助事業期間の終了であって、AP事業を含めた教育改革への取組み自体には終わりはないのですが、まずは申請時に掲げた壮大な目標をきっちり完了させるとともに、事業の成果をモデル

ケースとして社会へ還元するという使命を果たすべく、最終年度を目前に、本学AP部会における協議もいよいよ佳境に入りつつあります。さて、本紙面でご紹介のとおり、今年度も新たなメンバーがAP部会に参入いたしました。異なる職場で多様な経験を積んだ心強いスタッフが、思いもよらない発想や専門性を活かした新

たな観点から、残された課題の解決に力を貸してくれることを期待します。栄光のゴールまで、まだまだ奮闘は続きますが、教職協働・一致団結してハードルを乗り越え、最後に、メンバーみんなで喜びを分かち合えることを心から願っています(あまり先の事を言うと鬼に笑われますが・・・) (一)



関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514
E-mail: ap-info@ml.kandai.jp
教育開発支援センター <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>
AP取組 Web サイト <http://www.kansai-u.ac.jp/ap/index.html>
発行日/2018年11月 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター

KU-AP NEWSLETTER

November 2018 vol.6



大学教育再生加速プログラム



「交渉学」は Lifelong Active Learningの舞台となる

教育推進部 教授 山本 敏幸

文部科学省が支援する「大学教育再生加速プログラム」(以下、APと略記)においては、主体的なアクティブ・ラーニングを促す「交渉学」を主軸に据え、21世紀スキルや未来研究所(IFTF)が提唱するフューチャースキルの育成をはかってきた。これまで「交渉学」に関連する授業科目はもっぱら首都圏にある大学で開講され、「交渉学ワークショップ」も同じく首都圏にある企業ならびに大学において開催されてきた。しかし、本学のAPの取り組みを通じ、関西エリアにおいても同様の動きが展開されるようになっていく。このように交渉学を普及する営みが花を咲かせつつあるが、やがて迎える結実をより豊かなものにするために、わたくしたちは次のような工夫を凝らしている。

社会人もしくは大学生あるいはその両者を対象とするのが、一般的な交渉学ワークショップのスタイルである。社会人と大学生の双方が参加する場合、社会人の学ぶ姿を大学生の将来像として位置づけ、知見や意見を交換することによって、双方が自身の過去を振り返り、現在を確認し、未来を前向きに描く機会がそこには用意される。本学のAPでは、その対象をさらに広げ、大学生を高校生の将来像として位置づけることにした。

丹波市では2007年以来、成人と高校生が互いに手を取り合い、空き家となった町家を改築するなど、地域の活性化を目指している。そこでは地域の成人が高校生の将来像のモデルとなるはずであった。しかし高校生が一足飛びに地域を担う成人としての「未来の自分像」を描くにはリアリティが不足し、当事者意識も十分には育ちにくいという悩みがあったかもしれない。本学の学生スタッフ(ラーニング・アシスタント)は2014年から、兵庫県立水西高校(丹波市)の生徒たちと共に交渉学

ワークショップを企画・開催する取り組みを開始したが、この取り組みは、高校生と社会人の間に架橋するものであったと言ってよい。社会人より年齢の近い大学生、しかも社会人との協働体験を有するラーニング・アシスタントをロールモデルとすることによって、高校生は地域の問題や、それを担う将来の自分の課題を「我が事」として捉えることができるようになったのだ。このような高大連携の取り組みは、私たちの予想を超えて、丹波市に生活する高校生に新たな気づきと行動をもたらしている。

大学生との協働体験に学んだ高校生が中学生を対象とする交渉学ワークショップを企画し、小・中学校を含めた地域の信頼関係の構築に乗り出したのである。すなわち小学校から高校、大学までが、交渉学で一つに繋がったのだ。高校生の主体的に学ぶ姿が小中学生に未来の自己像を提供し、地域を変えていく原動力を育もうとしているのである。

未来を生き抜く力の根底には situational leadership — 臨機応変なリーダーシップ— という基本概念がある。成人と学生に学びながら、自らの立ち位置を模索し、定立しようとしている水西高校の生徒のすがたはまさに好例な実践例である。

AP開始以来4年が経過した。実社会には学んだ交渉学を活かして活動する卒業生がおり、学内には交渉学サークルを立ち上げるための準備を進める後輩の大学生がいる。この双方が交渉学を柱とした研修を提供するベンチャー企業の立ち上げを計画している。また、社会人を対象とした学び直しプログラムに交渉学のコースを導入することも検討されつつある。交渉学はその舞台を狭く限定することなく、Lifelong Active Learnerを育成するプラットフォームを提供しているのである。

部会からの報告/The DOTS部会

「The DOTS部会」では、考動力育成のための正課及び正課外プログラムを検討します。具体的には、①交渉学科目やクリティカルシンキング科目の開設及び運営、②交渉学ワークショップの企画・実施、③アクティブ・ラーニング型授業を行う教員の育成（セミナー・ワークショップの実施、教材開発など）を中心に行います。

IBM社員と関大LAが合同研修を行いました

8月3日、箱崎にあるIBM本社でIBM社員と関大LA・LA・OBが交渉学の研修を行いました。関大からは、LA・LA・OB、教員（山本）が参加しました。IBM本社からは、8名の交渉学を学ぶ社員の方々が参加してくださいました。IBM社員が社外の方々と協働で、業務内容の充実と質向上を目標に行っている勉強会の報告がありました。交渉学の研修では、交渉前の準備で重要となるクリティカルシンキング・PBLでのポイントを講師（三好さん・IBM交渉学講師）から解説いただきました。

交渉学の準備段階での「問題」の同定とそこから導き出される「課題」の違いと把握についての概念説明を受けた後、実際のワークを体験しました。最後に、IBM社員でもなかなか見学ができない、セキュリティセンター(SOC)の見学をさせていただきました。



ました。IBMの最先端テクノロジー、AI・ワトソンを使ったネットワークセキュリティのモニタリングを行っている部署の見学で学生のみならずIBM社員の皆さんも自社のトップシークレットのテクノロジーを垣間見て興奮していました。（教育推進部 山本敏幸）

第13回交渉学ワークショップを実施しました

8月4日、内装が一変した関西大学東京センターにおいて、第13回交渉学ワークショップを開催しました。関東地区に在住の関西大学OB・OGの方々に大学の学びの現状報告をすること、及び、最近の大学生のアクティブ・ラーニングによる学びについて日頃から関心をお持ちの社会人の皆様に、各大学で行っているアクティブ・ラーニングの実状を学生目線で情報共有を行うこと、学生主導型の交渉学ワークショップでアクティブ・ラーニングの実践体験をしていただき、交渉学の実状を知っていただくことが目的でした。午前の部はポスターセッション形式で、学生目線のアクティブ・ラーニングの実践・体験を参加者のみなさんと共有しました。他大学からは、実践女

子大学、甲南大学の参加がありました。午後の部は、交渉学の領域でのアクティブ・ラーニングを実践体験しました。社会人と学生の合同チームでプロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)によるアクティブ・ラーニングを行いました。参加者は24名(本学教員3名、学生6名、社会人15名/午前の部:15名、午後の部:24名)でした。 ※いずれも申込者、発表者を含む。

◆今回のワークショップの全体的なふりかえり◆

今回のワークショップについて、日頃校友会で活躍されているOBの方々の参加がありました。本来目指している姿が4年目にしてやっと実現できました。OBで落語家さんの林家染太師匠が応援とご

あいさつにいらっしゃいました。ワークショップ開始前の場を和ませていただきました。また、在学時代にLAとして活躍していた新社会人が参加してくれました。現役のLA達が自分達と同じような未来を生きる近未来の自分との対話が実現しました。今回の新しい取り組みとして、当日の参加が叫ばなかった方々のために、ビデオ会議サービスのZoomを使い、バーチャル会場から参加してもらるように工夫しました。次年度は国内外のOB、OGの皆さんを巻き込んで、大学レベルでのアクティブ・ラーニングの普及のみならず、企業研修も見据えたアクティブ・ラーニングの普及を目指していきたいと思えます。（教育推進部 山本敏幸）



ポスターセッション：「学生目線で捉えた各大学のアクティブ・ラーニングの共有」 OBで落語家さんの林家染太師匠が応援

富士ゼロックス社(大阪)で新入社員と関大LAが交渉学のワークショップを行いました

5月11-12日(1泊2日)の日程で、「18年度新卒教育タイアップインターンシップ」が兵庫県三田市にある富士ゼロックス社研修所でありました。この研修に本学から9名の学生が参加し、追手門学院大学から3名の学生が参加しました。研修の中で、交渉学のワークショップを新入社員と行いました。今回のような社会人・一年生、大学一年生という人生の節目の一年生が合同で行う研究は初めての試みでした。交渉学のワークショップで使用した教材は、本学の交渉学を学ぶ学生、LAが自分たちの学びをふりかえったビデオ教材と本学の学生と教員が合作した多者間交渉のワーク教材であり、本学の

交渉学におけるアクティブ・ラーニングを反映したものでした。研修の目指すところは、社会のマルチステークホルダーが協働してデザインする社会人力の涵養で、強いてはこういった協働が会社組織や社会全体をよりよい場にしていくという考えの実践です。これまで、富士ゼロックス博多、熊本、横浜などみらい、東京ミッドタウン等でも社会人と学生の合同交渉学ワークショップを行ってきました。しかし、今回のように学生が主体的に制作した教材コンテンツを使ってのワークショップは初めてでした。今後は社会人と学生が協働で企画・運営する



交渉学ワークショップを展開していきたいと考えています。（教育推進部 山本敏幸）

部会からの報告/教育・学修成果部会(TLA部会)

「教育・学修成果部会(TLA部会)」では、学修成果の可視化に向けた評価指標の開発や間接調査・直接調査を検討します。具体的には、①学修行動・到達度調査の項目検討・実施・分析、②コモンルーブリック開発及び開発に向けた調査、③学修コンシェルジュ育成のためのSD研修を中心に行います。

神田外語大学を訪問しました

神田外語大学は、学生は4000人、教員は200人(うち半分が外国人教員)という規模で、2014年からiPadによるBYODを推奨しています。学生の8割が女子学生であったため、軽いもの、デザイン性を考慮し、iPadを導入されました。学生は募集要項を参考に、各自iPadを購入します。大学ではGoogle Suite for Educationを活用しており、iPadで利用するアプリは教員が教材として買わせることもあります。BYOD環境が整備されているため、大学では、教室、ラーニングcommons、食堂等さまざまな場所で学生がiPadを利用されている様子が見受けられました。とりわけ学生が自律的に学ぶための学習環境である「SALC Self access learning center」では、多くの学生がiPadを活用していました。「SALC Self access learning center」は、学生の自主的な学びを促

すことを目的として設置されており、教室と自主学習のスペースにわかれています。教室は、英語の学習センターを取り巻く形で、15教室が配置されています。2階建ての2階部分では、英語のネイティブ教員による学習サポートを実施しています。また2階はEnglish onlyのルールとなっています。1階は学生の自習室としてスタディールームが11部屋あり、学生は予約を取って使うことができます。教室はガラス張りになっていて、廊下から教室の様子が見えるようになっています。ガラス扉を解放して、廊下と繋げることもできる開放的な空間です。学習支援スペースでは、ラーニングヘルプデスクがあり、11名のラーニングアドバイザー(教員)が対応しています。相談内容は、留学、もっと上手く英語を話したい、TOEFL、TOEICを向上し

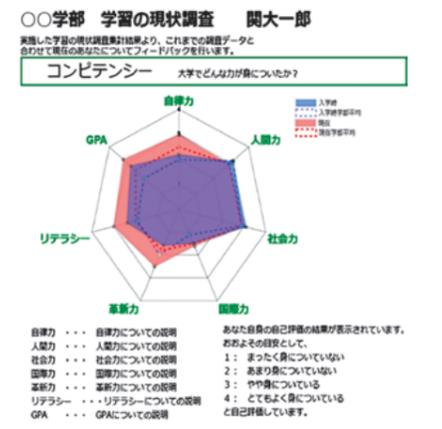
たい等です。神田外語大学ではTOEFL等の結果が履修条件になっていることも影響し、こうした相談が多いと考えられます。神田外語大学では学生が主体的に学ぶための授業外における学習支援環境の構築が充実しており、本学としても参考にすべき点が多々ありました。（教育推進部 岩崎千晶）



フィードバックシステムを開発中です

本学の教学IRプロジェクトでは、学生の主体的な学修を支援する能動的なIRを推進しています。具体的には、入学時調査およびパネル調査(各年次毎の調査)の調査結果を本学インフォメーションシステム画面から学生個人が閲覧できるシステムを開発中です。本システムでは、各種調査(入学時～卒業時)で一貫して評価している「5つの要素からなる考動力コンピテンシー」、「情報リテラシー」の他、「GPA」を加えた計7項目をリーダーチャートで表示できます。また学生自身の結果だけでなく、所属学部

の平均値と比較できるほか、各能力を伸ばすために、どのような授業を履修すればよいかのアドバイスを表示することができます。今年度より社会安全学部において試行的に導入をしましたが、次年度は実施学部が増える予定です。また今後、クラスター分析等を用いて学生の学修・履修行動を分析し、「学修予測モデル」の構築を目指します。これを構築することで、入学時調査の結果を基に、①今後の学生毎の推奨履修パターン、②学生生活を送る上でのアドバイス、を表示することができ、「フィードフォワード型」教学IRシステムを実現することが可能となります。（教学IR室 土井健嗣）



ルーブリックの活用およびアカデミック・スキルに関するアンケート調査を実施しました

教育推進部では、授業内外でのアカデミック・スキルの学習効果とルーブリックの効果を検証するために、「プロジェクト学習1」「スタディスキルゼミ」履修者に対してアンケート調査(表1)を実施しました。本稿ではアンケートの結果を抜粋して報告します。ノートテイク、情報リテラシー、ITリテラシー、レポート作成、口頭発表、グループワークの6つのアカデミック・スキルについて、授業で身に付いたか質問したところ、すべてのスキルについて88%以上の学生から「十分にできる」「なんとかできる」の回答が得られました(「授業で扱っていない」の回答は除外しています)。履修学生(主に1、2年生)の多くは、授業内でのレクチャーやグルー

プワーク、授業外でのレポート作成などの学習によって、大学での学びに必要な不可欠な知識・技術を身に付けることができたと考えられます。「ルーブリックを使用した」学生(73名)のうち、52%の学生が「課題を自分自身で評価するために使用した」と回答し、23%の学生が「他者と評価し合うために使用した」と回答しました。また、53%の学生が自分の達成状況の把握のため

に、36%の学生が今後の課題に活かすためにルーブリックを使用していました。学生はルーブリックを使用し、自身やクラスメイトの学習活動を振り返ることで、次の学びの指針を得ていたと考えられます。最後に、本アンケートの調査にご協力頂きました皆様にお礼申し上げます。（教育推進部 多田泰紘）

表1 2018年度春学期アンケート調査・回答状況

	プロジェクト学習1	スタディスキルゼミ	計
履修人数(クラス数)	127名(14クラス)	403名(19クラス)	530名(33クラス)
回答人数(回答率)	117名(92%)	321名(80%)	438名(83%)